

STAGE+を楽しむ(85)(HP 収載)
—スタセフスカとブルース・リウの共演—

1. 始めに

前報(84)に引き続き、STAGE+のスタセフスカとブルース・リウの演奏の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回は、スタセフスカとブルース・リウの演奏を選びました。

注目の女性指揮者スタセフスカとブルース・リウが共演

ショパン、シベリウス

収録日: 2023年4月19日

指揮者ダリア・スタセフスカとモントリオール交響楽団が、ショパンのピアノ協奏曲第2番を中心に据えた魅力的なプログラムをお届けします。ショパンが10代後半に書いたピアノ協奏曲のソリストを務めるのはブルース・リウ。ヴィルトゥオーゾとして新たなキャリアの扉を開きます。プログラムの冒頭を飾るソフィア・グバイドゥーリナの《終末の光明》は、バロック時代まで主流であった純正律と、それ以降の平均律という2つの調律法の対立を描いています。またシベリウスのシンフォニー第6番は、1923年に完成され、多くの技巧を駆使した4つの楽章からなります。シベリウスならではの洗練されたスタイルを表現した作品といえるでしょう。

ソリスト:

ブルース・リウ (ピアノ)

演奏:

Orchestre Symphonique de Montreal

指揮:

ダリア・スタセフスカ

曲目:

ソフィア・グバイドゥーリナ 《終末の光明》

ジャン・シベリウス 交響曲第6番ニ短調 op. 104

フレデリック・ショパン ピアノ協奏曲第2番へ短調 op. 21

ブルース・リウ(ピアノ)

ジャン=フィリップ・ラモー 組曲ト長調 RCT 6 より 〈野蛮人〉



3. 試聴の経過

指揮のスタセフスカも **Orchestre Symphonique de Montreal** も初めて聴きます。

グバイドゥーリナの《終末の光明》は、現代曲で打楽器が活躍します。

シベリウスの交響曲第6番は、女性指揮者ながらスタセフスカのきびきびした指揮で、北欧の静かな情景から最後の盛り上がりまでシベリウスらしい表情が伺えます。

ショパンのピアノ協奏曲第2番は、お馴染みの曲でブルース・リウの繊細なピアノが聴きどころで、演奏終了後聴衆の盛んな声援を受けていました。途中まで聴いてから、スイッチングハブからPCまでのLANケーブルにLANアキュライザーを装着してみました。ピアノの響きがより美しく、バックのオーケストラの音の粗さが取れてきました。

アンコール曲のラモアの組曲ト長調 RCT 6 の〈野蛮人〉は、元来がチェンバロ曲ですが、ピアノでの演奏です。



4. まとめ

シベリウスの交響曲第 6 番は、シベリウスらしい表情が、ショパンのピアノ協奏曲第 2 番は、ブルース・リウの繊細なピアノズムが聴けました。

以上